

中野重治全集

第十一

中野重治全集

第十一卷

筑摩書房版

中野重治全集第十一卷

昭和三十七年六月三十日 発行

定価 六八〇円

著者 中野重治

発行者 古田晁
東京都千代田区神田小川町二ノ八

印刷者 柳川太郎
東京都板橋区志村町五

発行所 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八

電話東京(291)七六五一(代表)
振替東京一六五七七六八
印刷凸版印刷株式会社
製本株式会社高陽堂

目次

太田正雄さんの死	三
本誌の出来るまで	六
日本文藝家協会の誕生	八
子供のための文学のこと	九
『モスクワ藝術座の回想』の回想	一六
文学者の国民としての立場	一七
荒療治の必要	三五
くさぐさの思い	三七
芥川賞の歴史の一こま	三三
貴司への返事をおねがひ	四八

詩の精神	一
批評の人間性	二
批評の人間性	三
批評の人間性	四
「珍説」とクルコフスキー將軍	五
『キャラメル工場から』について	六
短歌について	七
詩の言葉について	八
わかりやすい言葉を	九
書評について	一〇
文化のほんとうと嘘	一一
文学のこと 文学以前のこと	一二
漱石と漱石賞	一三
ある種の批評について	一四
日本文学史の問題	一五
文学と太平洋戦争	一六

文学と政党	一三三
「週刊展望」へ希望	一三五
働く人民の文化運動	一三七
『くにのあゆみ』についての答	一三九
小林多喜二の日に	一四四
三・一五——文化戦線の統一へ	一四五
労働者階級の文化運動	一四六
文学よもやまの話	一六〇
組合運動と文化問題	一六七
得能五郎と鳴海仙吉	一六八
歌のこと	一七一
露伴の死と参議院	一七三
文藝放談	一七五
一つの傾向	一八〇
露伴のこと	一八三
サルトルその他	一九二

戦後における藝術・文化・・・・・・・・・・	二〇三
新日本文学会「大会報告」のスケッチ・・	二一八
過去と現在・・・・・・・・・・	二二一
政治と文学・・・・・・・・・・	二二九
道徳そのもの　美そのもの・・	二三五
この新聞を一つの中に・・	二三七
伊丹万作について・・・・・・・・	二三八
短篇小説の話・・・・・・・・・・	二四九
過去の作家・作品の新しく呼びかけるもの	二五四
晴れたり曇つたり・・・・・・・・	二六五
続　晴れたり曇つたり・・・・・・・・	二七四
阿呆の一つおぼえ・・・・・・・・	二八四
太宰の死について・・・・・・・・	二九〇
「党生活者」について・・・・・・・・	二九一
死なぬ方よし・・・・・・・・・・	三〇〇
詩人としての河上肇博士について・・	三〇三

くそまじめな話	三二
罐焚きの「罐焚き」評	三七
「民族」ということに触れて	三八
「きわめて大人しい善良な戦争協力的小市民」という言葉につ いて	三六
埋め草	三八
今とそのころ	三六
去年から今年	三八
わたしは扱っている	三九
学びに学ぶこと	四〇
戦後民主主義文化運動の展開	四一
生れつつある新しい人間の姿を	五一
渡辺一夫さんへ	五四
舟橋聖一と森鷗外	五四
雪の降る日に	五六
政治的な話	六一

国宝とその問題	三六
文句についての文句	四〇〇
新しい仕事仕方について	四〇八
満足と不満と	四二一
むかしの読者	四二六
政治と文学といういやな題で	四三一
感想と思い出	四二七
十月と十一月	四三〇
これから小説を書く人へ	四三三
言葉のこと	四五三
魯迅先生の日に	四六一
こじつけをやめよ	四六六

文学談話

前がき	四七六
前書き	四七七
一 ひろい意味での文学とせまい意味での文学	四七九
二 文学をつくるということ	四八三
三 文学と政治との関係	四九〇
四 専門作家と勤労者作家ということ	四九七
五 働くものの文学と革命の文学 一	五〇三
六 働くものの文学と革命の文学 二	五〇八
七 日本の文学・文学運動をどうするか	五一五
八 文化問題と組合活動との結びつき	五二三
九 労働者の中から生れる新しいインテリゲンチヤ	五三九
十 労働者階級と新しい文化	五三七
問と答	五四四

解題(且原純夫)・	五六
作者あとがき・	五七

中野重治全集 第十一卷

太田正雄さんの死

太田正雄さんに私はとうとうお会いせずじまつた。あれこれのことで会つて話を聞きたいことがあり、私の会いたがつていることは次手に太田さんの耳にもはいつてゐるはずだつたけれども、ついじかにお会いして話を聞く機会なしですんでしまつた。いつかの「花の書の会」に太田さんが出て話をされたことがあり、その話は鷗外のことに触れてい、また私はその辺の話を太田さんから聞きたいと思つていたのでつたから、集まりのことをあとで聞かされた時には口惜しかつた。「花の書の会」には私も出たことがあるので、太田さんの出たその時の会の世話役がなぜそれを一筆私にも案内してくれなかつたかといひに恨めしく思つたことであつた。

私が太田さんに訊きたいと思つてゐたことの一つは鷗外に關してのことだつた。鷗外のことでは森於菟さんが太田さんに話してゐることがあり、そのなかには賀古鶴所さんが於菟さんに鷗外の死後話したことがまじつてい、そのなかには於菟さんたち鷗外肉親の人たちがみずから書くことはあるまいと思われような事がらが相当にあり、しかも太田さん自身がどこまでそれを書くか覚束ないふしがあるといふようなことがあつて、これは私の臆測、独断なのではあるが、それを知りたい、それを聞いて、それについて考へて、そうして自分の考へを書きたいといふ心組みが私にあつたので私は太田さんに会いたかつたのであつた。今になつて私の勝手な心持ちを書けば、太田さんはそれを書いておくべきであつた。

日本の学生の思想が大きく動揺した時代のある時期に、太田さんは日本の学生に日本についての認識を深めさせるために鷗外を読んだことがあつたが、その太田さんは多分学生たちといつしよに鷗外を読む、もう一度読むという態度を取られたらうとこれも私は臆測する。そこで太田さんがどんな気持ちで、鷗外のどういう点へ、どういう点へも、学生の眼を向けさせようとして鷗外をえらんだのか、そしてそういう点々はそれ自身として何だつたのか、また全鷗外のなかでどんな位置を占め、それらの点々をどのように含む鷗外は日本文学史のなかでどんな位置にいるか、そういうことでの太田さんのはばからぬ話を聞きたかつたのだつたが、やはり、太田さんはそれを書いておくべきであつたと今も私は思う。

太田さんに聞きたかつたことの一つは露伴に関してのことだつた。太田さんは、露伴が生涯のある時期にヨーロッパのヒューマニズムと正当な出会いをしなかつたことに触れて書き、しかしそのことをそれ以上くわしく説明せず、それを一般読者の前にひろげて発展させることをせずにしたがつたが、そのわずかにその点に触れた言葉の中身をたずねて、それがどの辺まで発展させて考えられるものかということとを口ずから聞きたかつたのであつた。

太田さんに聞きたかつたことの一つは中国の美術史に関してのことだつた。太田さんは、むかし名古屋の銀行クラブかどこかで日本の運命というようなことで講演をして、そのなかで中国美術史ないし中国美術思想史に触れ、南画をさらにさかのぼつた時代の美術と美術思想とから中国民族の哲学的な面に触れて話をすすめていたが、講演の主要目的からは多少はずれていたために美術思想史のことは途中で消えてしまつた形になつていた。ところが私はそのことをもつと知りたかつたので、『南画鑑賞』とかいう雑誌にちよつとそのことを書いたこともあり、私の訊きたいことのあらましを人を介して(?)太田さんに伝えてもらつたのもあつたが、自分の考えには発展がないから、Entwicklungがないからというような言葉をやはり人伝てに聞いたままで話をじかに聞くことはできずにしまつた。そうして、

太田さんのこの言葉は私の問を避けてのものでは決してなかったと私は今におき信じている。中国美術史に触れたあの問題は興味ふかいもので、太田さんはわれわれ（？）と違つて中国美術史上の作品を現物で見ているのだから、一つの親しい、学問的に極めて深い、しかし同時に十分通俗的な中国——東洋美術史が太田さんの手で書かれるのが望ましいと思つてどこかの本屋に話したこともあつたがこれは実現されてあつたらよかつたと思う。

太田さんは、木下杢太郎だつたこともちろんだが最近はそのに変化があつたのではないだろうか。太田正雄はやはりもはや木下杢太郎ではなくなつていたのではないか。太田正雄という藝術家・学者の時期がはじまつていたのではないか。そういう太田さんに私は右のような話、その他さまざまのことを聞きたかつたのだつたが今は駄目になつてしまつた。斎藤茂吉さんの学士院賞の会合のときに私は末席にいて太田さんを見たが、太田さんはからだが大きくて声は気持ちのいいバリトン（？）だつた。私は斜めうしろから遠く見たにすぎなかつたが、その今にのこる印象も木下杢太郎でなくなつた太田正雄という私の考えを裏書きしていたように思う。私は、太田さんのところへ押しかけて行つて、いそがしいその時間を無理にさいてもらつて、もしかしていくらかいやがられても自分の聞きたいことを聞いておくべきであつた。これからはそうしなければならぬ。

（十一月九日）

本誌の出来るまで

新日本文学会がどうして出来るようになったかは宮本が書いてある。『新日本文学』がどういう雑誌か、日本の文学者は何をしなければならぬか、文学の好きな日本人は何を読み、何をどう書き、日本人としても人間としてもどう生きねばならぬかということにも宮本は触れて書いてある。そこでよくわかるような順序、手続きを経て『新日本文学』が出ることになった。それは二月から出ることになった。

二月号が創刊号ということになった。

そこへ宮城県の山奥から徳永が帰つてきた。徳永との連絡はそれまで手紙でしか取れなかつた。その手紙もちやんちやんとは届かなかつた。その徳永が帰つてきて田舎の方の話をした。

そこからわれわれにこういうことがわかつた。二月創刊はおそすぎる。それでは十二月と一月とふた月あいてしまう。人々は待つてゐる。一方商売人連、民主主義に看板を塗るかえた連中や選挙めあての

連中が文学をも手がかりとして活動を始めてゐる。真面目な作家たちの結合の方が出足がおくれている。一日も早く会の成立を知らせねばならぬ。一日も早くこれから文学にはいつて行こうとする人々に国の文学の中心拠点を知らせねばならぬ。一日も早く、戦争中沈黙を強いられてきた作家たちに「書け、その堰を切つて落せ。」という合図をしなければならぬ。一日も早く、戦争中政府と軍閥とから強制と陰謀とで動員せられ、その反省からやや自虐的に活動再開をおくらせてゐる作家たちに「活動を再開せ